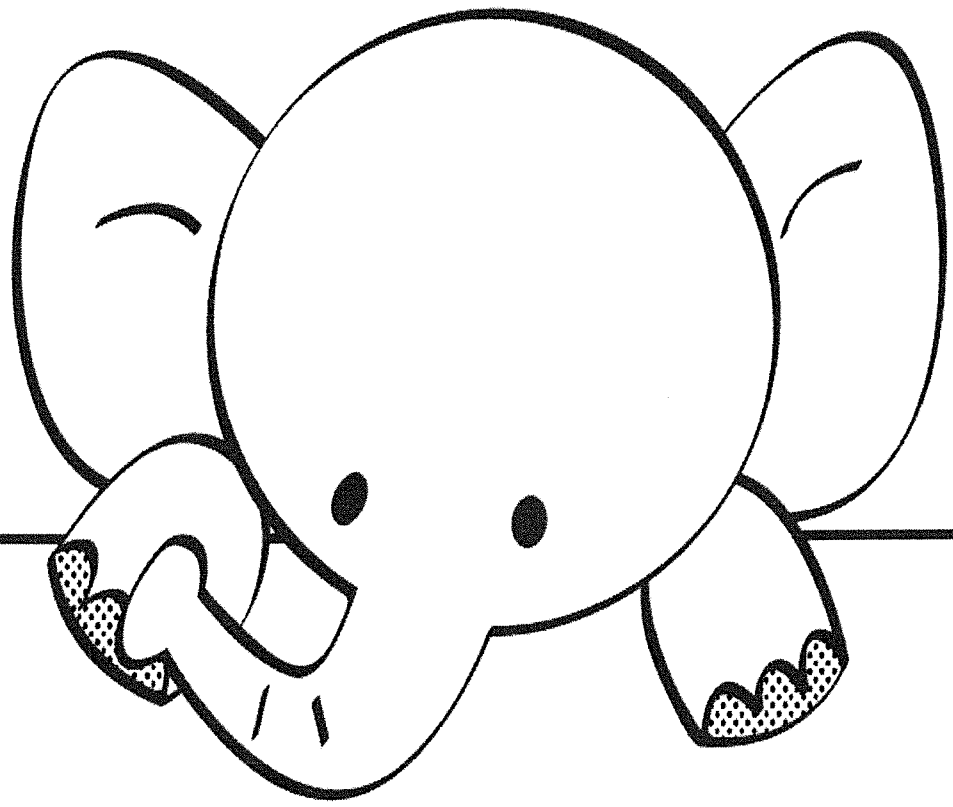




4 年

4年生 目次

4年1組 1～4ページ

4年2組 5～8ページ

4年3組 9～12ページ

四年一組

青少年読書感想文 県二席入賞作品

おいおいガラスのなぞ

(『ガラスのいいぶん』を読んで)

木下 瀬奈

「今日、オーイ、オーイって、鳴くガラスが、家に来ていたんだよ。」

と私のおばあちゃんが言い出しました。

「そんなガラス、いるわけないよ。」

と私は言ってしまうました。しかし、『ガラスのいいぶん』というこの本を読んで、本当にいたのかもしれないと、考えるようになりしました。

ガラスのことが気になったので、辞典で調べてみることにしました。すると、ガラスは、鳥の中で一番頭が良いということが分かりました。時には、人のまねをするガラスがいることも知りました。おばあちゃんの言っていたおいおいガラスのそんざいが、しう明されました。私のおじいちゃんは、おばあちゃんをよぶ時に、

「オーイ、オーイ。」

と大きな声で言います。それをまねて、おばあちゃんに声をかけてきたのでしょうか。よばれて、キョロキョロしているおばあちゃんを見て、おもしろがっていたのかもしれない。なんて頭が良さそうに思いました。私もそのガラスに会ってみたいになりました。

私の学校の近くには、神社があります。そこには、たくさんのガラスが住んでいます。この本を読んでからは、ガラスのことが気になって、時々空を見上げていました。すると、七月にはよく見かけていたガラスが、八月になると、いなくなりしました。不思議に思っ、散歩中もずっと空を見上げていました。ある日、ガラス二羽が大きな鳥と戦っているのを目撃しました。大きな鳥は、トンビでした。おばあちゃん

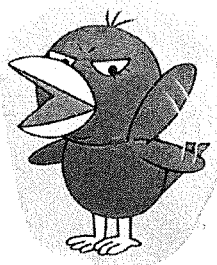
は、このトンビを「トンちゃん」と名付けました。このトンちゃんが神社にきていたから、ガラスたちを見かけなくなっていたんだと思いました。

今回、ガラスとトンビの戦いを近くで見ました。トンビはもちろんですが、ガラスたちも大きくて、すごい迫力でした。くるくると回りながらいかくしている様子は、一言で言うところ、「かっこいい」でした。私のガラスのイメージが変わった瞬間でした。これまで、ガラスは、ゴミ捨て場をあらわしているし、真っ黒だし、いつもじっと見ている感じがして、「こわい」というイメージしかありませんでした。しかし、この本を読んでから、いろんな角度からガラスを見られるようになりました。自分のもっているイメージと、本当はちがうというものが、実はたくさんあるのかなとも思いました。

今日は、まだガラスを見かけていません。またトンちゃんが近くに来ているのかもしれませんが。さらに、新しい発見ができるかもしれないので、これからも観察していこうと思います。

動物を飼うということ

(『犬たちを送る日』を読んで)



命苦 旺佳

私の家では、一匹の犬を飼っています。とてもかわいい、私の大切な家族です。だから、夏休みに『犬たちを送る日』という本を読んで、とても悲しい気持ちになりました。この本は、愛媛県にある動物愛ご保ごセンターのことが書かれています。この保ごセンターは、野犬や人間の勝手な理由で飼えなくなった犬やねこを引き取っています。その中で、一度は「じょうと会」という飼い主を探さず、殺処分されてしまうのだ

そうです。殺しよ分される犬やねこたちは、本が書かれたころは、年間四千頭もいたそうです。殺しよ分される方法もくわしく書いてありました。犬やねこたちのしよ分は、せいぎよ室からのボタン一つで行われます。動物たちは、追いこみ機に追われてゆうどう通路を通り、しよ分機の中で二さん化炭素が流され、その命を終えます。

本の中で、「しよ分された犬やねこたちの死に顔は、人間をうらんでいるように見えなかった。彼らはきつと、最後のしゅん間まで、飼い主がむかえに来ると信じて待っていたのだろう。」と書いてありました。

この文を読んで、私は心がしめつけられる思いでした。人間は、どうしてこんなに勝手なんだろうと思いました。犬やねこは、全く悪くありません。まるでゴミのように命をあつかっている人間が、全部悪いのです。

コロナウイルスの感せんしょうが流行して、家で過ごす時間が長くなり、ペットを飼う人がふえたと、テレビで見たことがあります。でも、いざ飼ってみると、しつけやお世話も大変だったり、仕事が無くなってお金が入ってこなくなったりして、ペットが飼えなくなつて、捨てられていく動物たちもふえたということでした。そのテレビを見てとても悲しくなりました。

私の家の犬は、毎朝六時前に起きて、みんなを起こします。起きたら、朝のトイレや散歩、朝ご飯をあげるなど、お世話がたくさんあります。私は、休みの日にはねむくて、世話をするのがめんどうになることもあります。でも、犬を飼う時にきちんと世話をし、大切に育てようと決めました。そして、なによりも顔を見るととてもかわいいです。大切な家族です。私たちが、もし世話をやめてしまったら、うちの犬は、自分で食べ物や水をじゅんびしたり、皿に水をくんだりすることはできません。フンをかたづけることも自分ではできません。もし自分が犬だったら、ほおっておかれたらいやだし、とても悲しいと思います。だから、ぜったいに毎日世話をやっています。

私は、うちの犬が大好きです。うちの犬も、私のことが好きだと思います。ほかのペットたちも、飼い主がきつと大好きです。人間を信じています。だから、私たち人間は、「命を飼う」ということを、もつと真剣に考えていかななくてはいいけないと思います。私は、うちにやってきてくれた命を一生大切にしていきたいです。

県文集「ともだち」掲載作品

二コへ



金尾 優花

二コ。いつもきらきらした顔で、私を笑顔にしてくれてありがとう。

いまは、大切な家族として、私たちといっしょにくらしている犬の二コ。実は、二コはうちに来ていなかったかもしれない。私たち家族は、ペットショップで、前から飼いたいわんちゃんがいきました。だから、初めてのころ、二コには気づいていませんでした。でも、そのワンちゃんや、他の人に飼われてしまいました。そこで、ほかにいないかなと思って見たところ、二コを見つけたのです。二コは、生まれたばかりでした。後ろの方で、気づかなかったのです。でも、二コを見つけて、一目で好きになりました。あのと二コに出会って、本当に良かったと思っています。

二コを家に初めて連れて帰る時、きんちようしてたまらなかつたのを今でも覚えています。二コも、不安そうな顔をしていた、

「育てられるかな。」

と、自分も不安になって、つぶやきました。でも、家に着くと覚悟を決めて、この子は私が幸せにしようと思った。

ニコという名前は、いつもニコがにこにこ楽しくいられるようにということと、家族が毎日笑顔でいられるようにということを考えて、笑う心とかいて、「笑心」としました。おかげで、ニコが来てから、家族みんなが毎日笑顔でいられます。特に、私やお父さん、お母さんが外から帰ってきた時に、しっぽをふって、「早く遊ぼう」という顔でむかえてくれる時、みんながいっしゅんで笑顔になります。本当にいつもありがとうございます。

これから、ニコが幸せでいられるようにしたいです。そのために、いっぱい遊んだり、散歩に行ったりしたいです。だから、いっぱい長生きして、これからも私たちを幸せにしてね。

県文集「ともだち」掲載作品
ねぐせ

ぼくのねぐせ
毎朝ついている
直そうとしても
なかなか直らないが
こなねぐせ

たまにはウルトラマンになる
ねこ耳みたいにもなる
とげとげサボテンにもなる
こまってしまう

でも
このねぐせのおかげで
家族みんなが笑顔になる
まあ
いいかな



眞方 仁也



県文集「ともだち」掲載作品
ユニバーサルデザインから

田中 慎太郎

「ここにもある。」

ぼくは、ジュースのふたを見ていました。見つけたのは点字です。調べてみると、点字は「ユニバーサルデザイン」ということが分かりました。ぼくは、これをきっかけに身近なところにユニバーサルデザインをさがして見ることにしました。

一番最初に見つけたのは、点字ブロックです。点字ブロックは、目が見えない人に道場所などを教えるための物です。点字ブロックには、点がたと線がたの二種類があります。点がたには、止まれや交差点、スロープなどの意味があります。線がたは、線の方向に進めという意味です。

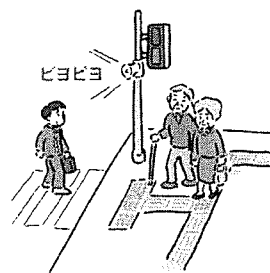
次に見つけたのは、シャンプールの横のときです。目が見えない人がシャンプーとリンスを間ちがえないようにしています。シャンプーにはとっきがあつて、リンスにはないこととで区別します。

また、歩行者用信号の音も、ユニバーサルデザインです。目の見えない人は、信号の色が見えないので、音で通って良いのかだめなのかをはんだんします。

もっと調べてみると、実はライターは、もともと手が不自由な方のために作られた物だということが、分かりました。マッチでは両手を使わなくてはいけなくて、かた手で火がおこせるライターが発明されたのだそうです。曲がるストロークやファスナーももとは、しょうがいのある方のためで作られた物らしいです。それを知らずに今まで使っていたので、びっくりしました。でも、今はしょうがいのあるないにかかわらず、みんなが役立つ物として使っています。ユニバーサルデザインって、みんなをくらしやすくする物なんだなと思います。

今年は、パラリンピックが行われました。見ていると、いろいろなしょうがいがあるんだということが分かりました。

ぼくは、大人になったら発明家になりたいです。しょうがいのある人もない人もみんなが使いやすい、くらしやすくなる物を作りたいです。



加奈子おばあちゃんへ

大橋 ゆい

天国の加奈子おばあちゃん、私の声がとどいていますか。孫のゆいです。私は、元気です。おばあちゃんの娘、私のお母さんも元気です。そして、ゆきじっち、おじいちゃんもとても元気です。

私は、おばあちゃんと一度会って見たかったです。会って二人で話してみたかったです。お母さんに、

「おばあちゃんって、どんな人だったの。」と聞いてみたら、

「出っ歯だったよ。」

と最初に笑って言いました。ひどいなと思いました。でも、

「やさしい人で、そんなことを言ってもげったいにおこらないう人だった。」

という、お母さんの言葉を聞いて、ますます会って見たかったと思います。

「どんな顔だったの。」

と聞いてみると、

「お母さんのお兄ちゃんによくにていたよ。」と教えてくれました。私は、おじいちゃんにしていると勝手に思っていたので、びっくりしました。

おばあちゃん、私は今がんばっていることがたくさんあります。一つ目は、漢字の練習です。以前は、適当に書くことが多かったです。でも、漢字は社会生活の上でとても大切な



もののだと、お父さんに教えてもらってからは、ていねいに練習して、覚えるようにがんばっています。二つ目は、あいさつです。あいさつすると、気持ちいいです。私が、あいさつした人も笑顔になっていきます。以前は、はすかしくて、言えなかったけれど、今は勇気をもってあいさつするようにしています。だれにでもあいさつができるように、もっとゆう気を出していきたいです。これから、たくさんお手伝いをしたいです。お父さんとお母さんにたくさんお世話や心配をかけたので、おん返しをしたいです。

加奈子おばあちゃん、見守っていてくださいね。

魚つり

上村 蓮恭

かんかん照りの暑い中
今日はつり
なかなかつれない
魚たちは何をしているのかな
あれ？
暑くて動けないのかな
食よくがないのかな
つかれているのかな
やる気がないのかな
もしかして
ぼくが見えているのかな
いやいや
今日はぼくのこと
きらいなのかも
あああ
ぼくもやる気がなくなった
さあ帰ろう



四年二組

わたしのあこがれの人

山下 結愛

「かんご師になりたいならナイチンゲールの本を読んでみて。」とお母さんに言われ、ナイチンゲールのことを知りたいと思い、わたしはこの本を選びました。

ナイチンゲールは、イタリアのゆう福な家庭で生まれました。ナイチンゲールがかんご師を目指した時代は、女の人が社会で働くことがよく思われな時代で、家族から大反対されたそうです。しかし、ナイチンゲールは、かんご師になりたいという強い思いでかんごの勉強をして、かんご師になることができました。わたしは、どんなことがあってもかんご師になることをあきらめなかったナイチンゲールの意志の強さを見習おうと思いました。

ナイチンゲールがかんご師になったころ、クリミア戦争が始まりました。戦場で多くの兵士が傷つきました。また、寒さや病気で死んでいく兵士も多くいたそうです。そこで、かんご師団の責任者として戦地に向かったナイチンゲールは、戦場でできずついた人や病気の人のかんごをするだけでなく、病院の改ぜんにも力をつくしました。自分のし金で病室やベッドを清けつにし、栄養のある温かい食事を出し、どんなに時間がない時でも夜の見回りをかさず、かんご達を安心させたそうです。ランプを持って優しくほほ笑みかけるナイチンゲールの姿は、患者にとって天使のようでした。わたしも患者さんが安心できるようなかんご師になりたいと思います。

ナイチンゲールが病院を改ぜんしたことにより、なくなる兵士が減りました。その後、ゆうしゅうな



かんご師を育てるためにかんご学校を作り、病院のかんきょうやかんごについて書いてある、「病院覚書」や「かんご覚書」などの本を残しました。今の病院やかんごのきそを作ったのは、ナイチンゲールだということを初めて知りました。

わたしはこの本を読んで、かんご師はやさしいだけでなく、物事を正しく見る目と強い心が必要なのだと分かりました。かんご師は、人の命に関わる責任の重い仕事です。つらいことも乗り越えられる強い心、人を思いやることができるやさしい心を身につけ、ナイチンゲールのようなかんご師になれるようにがんばりたいです。

ぼくの家族

増田 旺起

ぼくの家族はいつも元気いっぱいです。それに、ぼくが悲しかったり、つらかったりするときにはいつもはげましてくれます。

お父さんは、いつもぼくの野球のことを考えてくれています。

お母さんは、野球の送げいやお茶当番をいつもがんばってしてくれます。妹は、習い事があるのに、ぼくの野球の応えんに来てくれます。妹は、ぼくが野球をしているので、もしかしたらもっとお父さんやお母さんにかまってもらいたいのかも知れません。なので、ぼくは妹に野球で活やくしているところをたくさん見せて、よろこんでもらいたいと思っています。

ぼくのおじいちゃんは、ぼくが野球を始める前になくなってしまいました。おじいちゃんは、家族で一番やさしかったので、とてもさみしいです。もっと、おじいちゃんといっしょにいたかったなと思います。

おばあちゃんは、家族で一番ぼくのことをはげま



してくれます。

ぼくは、家族にたくさんはげまされたことがあります。ぼくも家族をはげましたり、やさしくしたりしていきたいです。

「あなたの声がききたい」を読んで

山口 和歩

わたしは昼休みに学校の図書室へ行きました。いつもは行かない本だなの方へ行ってみると、おもしろそうな本がずらりとならんでいました。その中で、気になったのが、「あなたの声がききたい」という本でした。題名を見て、どういう意味だろうと不思議に思い、この本を読んでみることにしました。

この本の主人公の加奈子さんの両親はちょう覚障がい者です。そのことで小さいころから、親せきや学校の人たちから差別を受けてきました。その人たちを見返したくて、加奈子さんは勉強やスポーツ、その他にもいろいろなことをがんばったそうです。差別を受けたくやしさをばねに努力をして、加奈子さんはかんご師を目指します。

本の中で、加奈子さんが小学生の時に、テストで百点満点をとったのに、クラスメイトから自分の両親の悪口を言われた場面がありました。わたしはなぜ両親がちょう覚障がい者だからといって、悪口を言われなければならぬのだろうと、とても悲しい気持ちになりました。でも、そんな中でも加奈子さんが前を向いて努力する姿にとっても感動しました。もし、わたしが家族の悪口を言われたら、加奈子さんのように前を向くことはできないかもしれません。加奈子さんは、とても心が強い人だと思いました。

しかし、ある日、加奈子さんが友達の家遊びに行ったときに、「ただいま。」

と言えば、顔を合わせなくても、

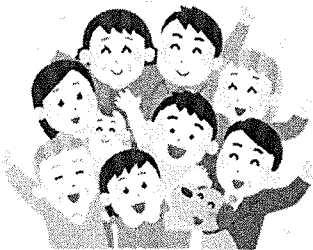
「おかえり。」

と友達のお母さんが返してくれる姿を見て、ちょう覚障がい者の両親がいやになり、むしをすることがありました。わたしは、その時の加奈子さんは、両親の気持ちを考えない、いやな子だと思っていたしまいました。でも、ずっと前から、両親のことですごい思いをしてきた加奈子さんの気持ちも分かります。加奈子さん自身も、悪いことをされていないのに、むしをして両親をせめるのはいけないことだということも分かっていたのだと思います。だから、加奈子さんは、両親をむしすることをやめたのだと思います。

また、加奈子さんは、自分の夢をかなえてかんご師になります。わたしは、加奈子さんがかんご師になろうと思ったきっかけが素晴らしいと思いました。それは、加奈子さんのお父さんが入院した時に、病院に手話のできるかんご師がいればどんなにいいだろうと思ったそうです。わたしは、聴覚障がい者の人たちの助けになりたいという加奈子さんの気持ちがすごいと思いました。

最後に、わたしが一番感動した場面は、加奈子さんに結婚相手が出て、そのことをお母さんにメールで知らせると、「よかったね。もしも神様にひとつだけ願いがかなうとしたら、あなたの声がききたい。」という返事がきて、加奈子さんが号泣してしまうという場面です。両親に自分の声が聞こえないことで、わたしには想像もつかないくらいいつらいこともきつとあったのだと思います。

わたしは、この本を通して、ちょう覚障がい者やその家族の苦ろうを知ることができました。だから、これから出会う人たちと、お互いに支え合っていきたいと思っています。



遠足の思い出

津曲 美玲

わたしは、十月二十二日に秋の遠足に行きました。

まず、学校に着いてからみんなでそうじをして、バスに乗ってリサイクルプラザに行きました。

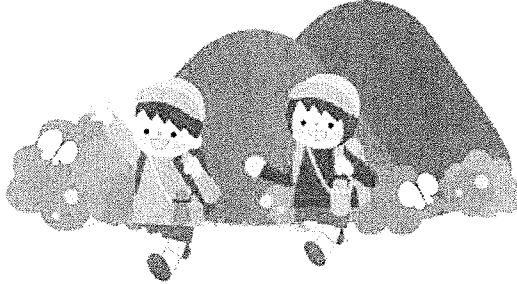
リサイクルプラザには、いろいろな機械がたくさんありました。わたしは、ゴミピットにあるクレーンがトンの重さのゴミを持ち上げると知ったときにとってもびっくりしました。また、リサイクルプラザではビデオを見て、ゴミのしよ理のしかたなどについて教えてもらいました。

次に、バスに乗って、志和池中央ふれあい広場に行きました。そこは、とても広くて、たくさん遊具がありました。

広場に着いてすぐに、国語の授業でみんなで話し合っ
て決めたレクレーションをしました。たくさん走ってとても楽しかったです。

そのあと、お昼ご飯を食べる時間になりました。お弁当は、すみっこぐらしのお弁当で、かわいくてとてもおいしかったです。それに、友達と食べることができたのでよかったです。お弁当を食べた後には、持ってきたおかしを食べました。

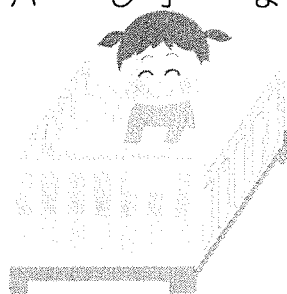
おかしを食べた後に、遊具で遊ぼうとしたら帰る時間になってしまったので、「もっと早く食べればよかったなあ。」と思いました。でも、いろいろな見学をしたり、遊んだりすることができて、とっても楽しい遠足でした。



「二平方メートルの世界で」を読んで

南 昂志

「二平方メートルの世界で」に出てくる小学三年生の女の子は、三さいのころから病気で入院をくり返していて、二平方メートルのベッドで毎日いろいろなことを考えています。つらい検査をがんばったり、さみしい思いをしたりしているとき、これまでに入院してきた子どもたちの落書きを見つけて、一人じゃないことに気がつきます。ほんと、この女の子の学年が近かったのでこの本を読んでみることにしました。



一番心に残っている場面は、物語の最後でオーバーテーブルの落書きを見つけた場面です。その落書きは、これまで入院していた子どもたちのやりとりが書かれていました。会ったこともない子どもたちが、お互いにはげまし合ったり、応えんし合ったりして、女の子はとてもうれしい気持ちになったと思います。

ほかに心に残っている場面があります。女の子の家族は、四人家族で、お父さんは仕事をしていて、お母さんは女の子につきそっています。三さい年上のお兄さんは、一人で身のまわりのことをして学校に通わなければなりません。女の子は、そのことを申しわけなく思っているとお兄さんに伝えましたが、お兄さんは、

「べつに気にしなくていいよ。しょうがないんだよ。」

と言いました。それでも、女の子は申しわけないと思っていました。ほんとにも兄がいます。もし、ぼくが入院したとしたら、兄は身のまわりのことを自分でしないといけないからとても心配です。

また、ぼくはこの本を通して、自分と年れいの近い子どもたちが病気で苦

しんで、やりたいことができなくなっていることを知りました。この女の子は、自分と同じく、病気で苦しんでいる子どもたちにはげましてもらっていました。ぼくも自分が苦しくても人のことをはげませるような人になりたいです。

そして、家族にも感じやしなげなければならないと思いました。ぼくの家族も女の子と同じで四人家族です。もし家族のだれかが入院してしまったら、家族全員が協力しなければなりません。女の子のお兄さんは、身のまわりのことは、自分でしていました。今、ぼくは家族にいろいろなことを手伝ってもらっています。このことは今まで当たり前だと思っていました。だけど、この本を読んでとてもありがたいことだと感じました。

これから、ぼくは病気などで苦しんでいる人をはげましたり、家族に感じの気持ちを伝えたりしていきたいです。

おいしい白米

盛満 未結

わたしは、お米が大好きです。

お米を作ってくれている人たちは、すごいないつも思っています。わたしの家の近くには田んぼがあって、お米を作っている人たちをよく見かけます。いつも暑い時や台風の際に、お米を守ってくれています。

今まで、あまりお米を作っている人や農家の人たちのことを考えたことがありませんでしたが、お米を作る人のすがたを見てから、よく考えるようになりました。

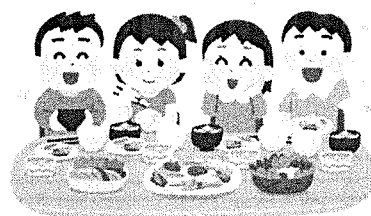
そして、今までよりもっとお米がおいしく感じるようになりました。さい近、わたしはよくおかわりをします。おかわりをするとう、

「よく食べるね。すごいねー!」

とお母さんとお父さんからほめられます。

よく勉強をして、いっぱい運動するとおなか为空きます。学校で食べる給食も家で食べるご飯もとてもおいしいです。お米をおなかいっぱい食べると、力がみなぎってきます。できなかったことにもチャレンジしてみようという気持ちになります。また、苦手なじゅぎょうも集中して話をきくことができます。おなか为空いているときは力が出ないのに、ご飯を食べると急に元気になります。それに、ねるときもおなか为空いているとなかなかねむれないのですが、ご飯をいっぱい食べてからねるとぐっすりねむれます。お米を食べると、わたしの体のもともなっているんだなとあらためて思いました。

これからご飯を食べるとき、お米を作っている人たちに感じやして、残さず食べたいと思います。

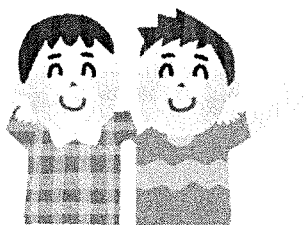


感じやの手紙 親友へ

三年生の時に仲良くなって、学校から一緒に帰ってくれたり、休みの日に遊んだりしてくれて、ありがとう。

家に遊びに来てくれた時には、ぼくの弟ともいっぱい遊んでくれてありがとう。一度も同じクラスになったことがないのに、こんなに仲良くなるとは思っていません。よかったよ。今では何でも話せる友だちになれてうれしいよ。

これからもいろいろなことを話したり、一緒に遊んだりして、仲良くしていこうね。



春田 瑛斗

四年三組

「ぼくは、お兄ちゃんだから」を読んで

尾崎 凜太郎

この本を読もうと思ったわけは、物語に出てくる人物が、ぼくと弟にしているなと思ったからです。

ずっと弟がほしいと思っていた健太は、小さなお店で弟ロボットを借りてきます。最初は、弟ができた事がうれしかったけど、けんかをしたり、おやつの事でもめたりして、お兄ちゃんだからがまんする事が多くなりました。日に日にいやな気持ちが大きくなって、とうとう弟ロボットをお店に返してしまいます。弟ロボットがいなくなると、今度はさみしくなったり取りもどしたくなりますが、それはできませんでした。その後、お母さんのおなかの中に、赤ちゃんがいることが分かって、健太は本当のお兄ちゃんになっていくというお話です。

ぼくには、小学一年生の弟がいます。ぼくと弟は、毎日のようにけんかをします。弟は元気いっぱい、じょうだんをよく言います。ずっとしゃべっていてうるさいけど、そのおかげでぼくの家はにぎやかです。

ある時、お母さんから弟が生まれた時の事を聞きました。ぼくは、弟のおむつを持ってきたり、泣いていたら、

「泣いているよ。」

と教えたりして、かわいがっていたそうです。

この本を読んで、健太と弟ロボットは、やっぱりぼくと弟にしているなと思いました。ぼくも、健太と同じで、

「お兄ちゃんだから。」

と言われているやだなと思った事があります。こはんやおやつの時、最後の

一つが残ったら、ぼくもほしいけど弟にゆずっています。兄弟けんかをし、ぼくがおこられる事もよくあります。「お兄ちゃんだから」と思っているがまんする事がたくさんあります。

でも、もし、ぼくに弟がいなかったら、いっしょに遊んだり、おしゃべりしたりする事もできません。ぼくは、この本を読んで、やっぱりぼくには弟がいて良かったなと気づきました。友達もみんな、弟がほしいというのも、そういう気持ちからなんだろうなと思いました。

健太は、生まれてくる赤ちゃんにやさしくしてあげるお兄ちゃんになって、きっと赤ちゃんを大切にしたいと思います。ぼくも、この本を読んで、弟ができない事を手伝ってあげたり、もっとやさしくしたりしてあげようと思えました。これからは、ぼくももっと弟の気持ちも聞いてあげたいと思います。そうしたら、おたがいの気持ちが分かって、もっとなかくすこせそうです。

カラスの気持ちとわたしの気持ち



黒木 渚

みんなにきらわれがちで、自由気ままに生きているイメージがあるカラスには、いいぶんがあるのかなと思ったわたしは、この本を手に取りました。この本は、人と生きることを選んだカラスのいいぶんを耳をかたむけてみる本です。

ある日、筆者はごみ置き場をあらすカラスを追いはらい、はらが立っていました。

「カラスは人間がどんな生きものなのかということに気づいているような

のに、わたしはカラスのことなんて何も知らなかった。」

と言った言葉が、わたしと同じでどきっとしました。わたしもカラスは身近な鳥なのに何も知らなかったからです。筆者は、カラスの弱みを見つけようと考えました。

そんな時、ある事けんが起こります。ごみ置き場でカラスを追いはらっているちょうど同じ時期に、たまごをぬすまれ続けるということがあったのです。しかも、ずいぶん長い間……。そのころ、筆者は、五人グループで毎週五キログラムのたまごを取りよせていました。たまごのとどけ先はぜったいに通りすがりの人が気づくような場所ではありません。それなのに、たまごがぬすまれたのです。たまごは、がんじょうなプラスチックのコンテナに入っていて、しっかりとパルプのふたがのせてありました。わたしは、そんながんじょうなようきとふたなのに、どうやってぬすんだのだろうと思いました。カラスには、ぬすむことなんてできないと思っていたいました。けれど、カラスがはん人なのです。しかも、三十分の間に十二こもぬすんでいるのです。わたしは、とてもびっくりしました。カラスはいったいどうやってぬすむことができたのだろうと考えました。

カラスは毎週きそく正しくやってくる配達車を覚えていて、その車を追ってたまごをぬすみに来ていたのです。すごい記おく力だなと思いました。ぬすんだたまごは、歩いて五分もかからない家にあるカラスのすに持って行っていました。最初は、カラスの夫ふでぬすみに来て、自分たちにたまごがうまれると、オスがメスのためにたまごを運んでいたのです。ひながかえるとぬすむ数がふえました。きっと夫ふで運んだにちがいありません。三十分で十二こも運んだので大いそがしかったと思うけど、ひなもよく育ったのでよかったです。たまごのからは、人に気づかれないように、雨どいの中におしこんでいました。人間でも、そこまで考えつか

ないと思いました。

この本を読む前は、カラスのことを何も知らなかったけど、読んでみると、カラスの知えやどんな生きものであるかということが分かりました。これからカラスを見かけたら、どんなことをするのかをじっくり観さつたいです。

坂本龍馬を知って

赤土 尊哉



ぼくは、あまり本を読むことが好きではなく、図書室で何かいい本はないかなと探していたら、この本の表紙に「世界をゆめ見たばく末のヒーロー」と書いてあり、坂本龍馬はどんな人なんだろうと気になって読んでみたいと思いました。

龍馬は、土佐の身分の低いぶしの家に生まれました。子どものころは泣き虫でした。二十四才でめんきょかいでんのけんの達人になりました。龍馬は、最初から強かったわけではないということを知って、自分で力してがんばってきたんだろうなと思いました。

龍馬には、目標がありました。目標をもつことは、とても大切だと思いました。なぜなら、ぼくも昔、スイミングをしていて、なかなか平泳ぎができなかったけど、スイミングの先生にたくさん教えてもらい、何回も練習して合格することができました。だから、目標がないと続けられないと思います。

龍馬は、土佐はんをぬけて勝海舟をほう問し、弟子入ります。その時勝海舟の願いであるじゅくを2けん建せつするため、使者として福井県に行きます。でも、なんで土佐はんをぬけてまで、勝海舟のもとへ行くのか

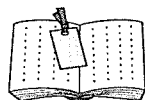
が気になりました。龍馬は、その前は、勝海舟をあんさつしようと考えていました。なぜなら勝海舟はアメリカへ行っていたからです。勝海舟は、それがゆるされていました。

ある時、龍馬はしゅうげきを受け、命を落としてしまいました。もしも長生きしていたら、その後の日本は争いをせずに、もっと早く平和になっていたのではないかと思いました。

坂本龍馬についていろいろ調べていると、数々の名言がありました。その中で「世の中に失敗ちゅうことはありせんぞ」という言葉が、ぼくは気に入りました。生きていく中で、たとえ失敗しても、またチャレンジして次に進めばいいと思ったからです。

この本を読んで、ぼくも坂本龍馬のように、何かをやりとげたい強い気持ちと、おそれずに動く勇氣をもちたいなと思いました。

「ヒロシマのいのちの水」を読んで



前田 凛介

ぼくは、「ヒロシマのいのちの水」という戦争の本を読みました。この本は、うねおばあさんが、本当に体験したお話です。なぜ、ぼくがこの本を読もうと思ったかというと、毎年八月になると、テレビで戦争の時に原ばくが落とされている様子を見るので読んでみようと思いました。この本で最初に、おばあさんが水のたくさん入ったペットボトルを子ども達に見せながら、

「この水のことをお話します。」

と言っていました。本の題名にも、水が出てきたので、どんな関係があるのかなと思いました。

何十年前、うねおばあさんは、働くお母さん達のかわりに子ども達のもんどうをみていました。ちょうどおやつを作っていた時に原ばくが落とされました。うねおばあさんが気づいた時には、まわりが真っ暗になっていました。うねおばあさんは、自分のことよりも子ども達のことを心配して、外をさがしに行きました。その時、頭や体から血を流している人や、男か女か分からないすがたになっている人達がそろそろといたそうです。ぼくは、そんな地ごくみたいなのがいつしゅんで起きるなんて、とてもおそろしいと思いました。そして、一人の人が、うねおばあさんの手をつかんで、

「水がほしい。」

とうったえてきたので、水をくんできてあげようとしたら、別の人に止められました。ぼくは、うねおばあさんは、子ども達をさがしに行っていたのに、その人のためにも水をあげて助けようとするなんて、えらいなと思いました。ぼくだったら、自分の命を大切に思うので、一人でにげていたかもしれません。では、なぜ水をあげるのを止められたかというと、その水にばくだんのどくがまじっているから、飲ませたらその人が死んでしまうので止められたのでした。うねおばあさんは、その人がのどがかわいてかわいそうだと思ったから水をあげようとしたけど、もし、水をあげていたら、その人を死なせていたかもしれません。原ばくで、街は焼かれ、ほのおに包まれてしまったので、水をもとめていた人が多かったそうです。苦しかったらうなと思いました。

やがて、戦争が終わって生活が落ち着くと、うねおばあさんは、あの時あげられなかった水をおそなえすることにしたそうです。それから、何十年も、百二十か所あるいいいひをたずねて水をおそなえしてきました。今では、ペットボトルに水を入れて運んでいます。だから最初に水の入った

ペットボトルを見せながら話しはじめたんだと思いました。

ぼくは、戦争が終わってから、何十年も続けているなんて、すごいなと感心しました。ぼくも、うねおばあさんみたいに、何かをずっと続けられる人になりたいと思いました。

木のように

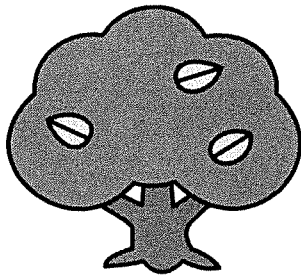
ずんずん　　と　　背をのびし
空へ向かって　のびてゆく
枝を広げ　葉をしげらせ
どこまでも　のびてゆく木

あつい日差しにも
はげしい風にも
つめたい雪にも
カラカラな空気にも　負けないで
大きく　のびてゆく木

わたしも　なりたい
木のように

つらいことも　のりこえて
ゆめへ向かって　進むんだ
たくましく　力強く
ゆめに向かって　のびてゆけ

野崎　志織



三学期の目標

木脇　茉愛

新しい年になったので、わたしは目ひょうを四つ立てました。

一つ目は「あいさつをする」です。わたしは、今まであいさつをするとはできています。でも、大きな声が出せなくて、相手に聞こえないことがあります。だから、もっと声を出して、相手に聞こえる元気なあいさつをとりたいです。

二つ目は「理科のテストをがんばる」です。わたしは、テストの時にかんちがいをして答えることがありました。そのために、他の教科にくらべると、あまり百点をとることができませんでした。だから、授業中は先生の話聞きのがさないようにして、今までより、さらにふく習に力を入れて完ぺきにできるようにしたいです。

三つ目は「長い文章を書く」です。わたしは、長い文章を書くことが苦手です。作文や日記を書く、ノート二ページ分の量しか書くことができません。そこで、三学期は、上手な友達の作品を参考にして文章力をつけたり、自分がたくさん書きたくなるような話題を見つけて、日記や作文を書くようにしたいです。

四つ目は「クラスのみんなと遊ぶ機会をたくさんつくる」です。二学期に、きかく係が遊びを計画してくれて、みんなで楽しく遊ぶことができました。だから、三学期は、わたしがきかく係になって、遊びを計画したいと思っています。そして、自分から友達に声をかけて遊びにさそって、クラスみんなで楽しく出来る遊びをやりたいです。

三学期は、一年の中で一番短い学期です。苦手なことにもチャレンジして、五年生に向かってど力していきます。また、友達ともっと仲良くなって、楽しい思い出をたくさんつくりたいです。